

毎日はずこしだけかなしい

デザイン学科
遠藤拓人

Days are sad a little

Department of Design
ENDO Takuto

『遠くで鳴った電話のベル、灯り始めたマンションの明かり、時折する子供の声、通り過ぎるオートバイの音。自分とは無関係のむこう側の世界。かたい街路樹の葉から漏れた光が、霞ガラスにゆらゆら揺れて、つめたい風が手や首にふれる。もうすぐ冬。誰かの家の夕餉の匂い。毎日はずこしだけかなしい。いつも憂鬱の残滓が、そっと隣に座っている。』

恒常的に日々のことを記している。これらの作品群はそのテキストをもとに作成した。

随筆や日記というにはずこし茫漠とした、感情や景色の筆録。散らばった言葉はイメージの残像を運びながら、あとからビジュアルとして復元される。

その際に現実には脚色され、演出され、削ぎ落とされる。詳細に書き出す（描き出す）ことで消えていく機微のようなものを、イラストレーションは捉えることができると思う。イラストレーションは常に説明的情報の伝達と情動的情報の伝達を混在させている。

傍観して眺める日常が、時折、吹く風のように自身の情動に触れることがある。原風景なのか、羨望なのか、郷愁なのか、もしくは個人のフィルターを通して見た、もっと広い風土を呼び起こす感覚なのか。

これはその記憶の記録である。

また、自身の作品にとって、これまで「黒」は闇を形成するためのファクターであったが、今回は光を見せるために意識的に使用した。自身の制作の文脈の中では新たな試みである。













